

【一般演題2】 第6席

「吉田意休と『刺鍼家鑑集』」

大阪 森 秀太郎

出雲大社の神官といわれる吉田意休が、いわゆる吉田流の鍼術をはじめて、その子の吉田喜庵、孫の吉田一貞に至って、『刺鍼家鑑集』もしくは『刺鍼家鑑』を公にした。

手元にある『刺鍼家鑑集』は、寛文元年（1661）の発刊、手写本である。一方『刺鍼家鑑』は一貞の流れをくむ越前の勝沢一順の跋になり、嘉永6年（1853）に発刊されている。内容はあまり違わないが約200年離れている。

本書の特徴として、症状或いは病名別に、使用経穴名と鍼の方法が述べられているが。経穴名が従来の成書と著しく異なっていて、取穴も一部述べられているが、不明の点が多かった。この度『吉田流鍼穴法』明治11年（1878）なる文献が手にいり、経穴が明瞭になったので報告する。